

# 道

2021・5・5

通信 No 1633



キイチゴ

リレーエッセイ 《コロナ禍で多くのカタカナ語が生まれました。》

「Social distancing」という英語を省略した「ソーシャルディスタンス」も何気なく使われていますが、その意味は「社会的距離（心理的なものも含む人と人との距離）」で、社会的孤立や民族・集団の違いによる距離感を示す際に使用される学術用語であることをご存じでしょうか。現在は、人と人とのつながりは引き続き保ってほしい（WHO）とのことで、フィジカルディスタンス（物理的距離）を使うよう推奨されています。セーフディスタンス（安全距離）も良いかもしれません。

ing が有ろうが無かろうが些細なことだと思いますか？ 言葉には人を変える力があると思います。知らずのうちに「心の距離」が離れ、非寛容が芽生えることもあるのではないのでしょうか。翻って、合唱団の活動休止中も欠かさず発行される「道通信」は、フィジカルには離れていてもソーシャルには近しく保つうえで大きな役割を果たしていると思います。発行と送達努力に感謝しています。

(T. 石田 勉)

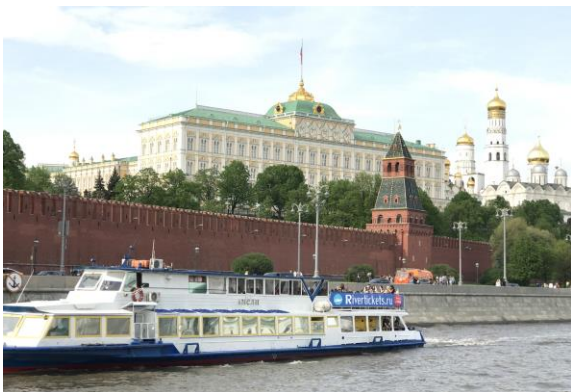
《投稿》 =40年前のロシア= NO2

福本三朗

モスクワ・シェレメーチェボ空港に着陸し、機窓から銃を持った警備に驚き、空港や鉄道・港など公共施設・軍事施設の写真撮影は“厳禁”と言われた時代。違反する場合はフィルムが没収されるだけでなく、スパイ容疑で聴取、挙句の果ては“シベリア送り”と驚かされた話も。街中の建物には赤い大きな垂れ幕（「ソ連共産党 万歳」「万国の労働者よ、団結せよ！」など）がいくつも掲げられていた。ソ連滞在の外国人の行動は大きく制限され、モスクワだけのVISAではレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）など他都市への移動はできなかった。また外国人だけのアパートへのロシア人の入館は制限され、その逆も難しい時代であった。

ホテルも外国人向けとロシア人向けも厳密に区別、ロシア人は外国人向けホテルに「入館証」なしで入ることができなかった。それでも夜になると、なぜか派手に着飾ったロシア女性がホテルロビーの外国人にお声をかけることは珍しくなかった。

社会主義国には“失業”はなく、すべての人間は働く権利があり、仕事を与えられることになっていた。男女平等の下で、女性も当然ながら、バスや路面電車の運転や建設作業にたくましく従事していた。



しかし“サービス”という概念はなく、物を買う場合でも求める商品を自由に手に取ることができず、また購入するときは先に会計を済ませた後、そのレシートを渡して希望する品を入手できた。

当時モスクワでも“行列”が日常茶飯事で、平日日中でも行列が珍しくなかった。トイレットペーパー・リンゴ・トマトなどが店に出ると、市民は皆並んで買うことに慣れていた。たとえ厳冬期であっても、傷ついたリンゴであっても。

運営委員会 5月5日（水）中止。5月12日（水）午後3時～5時へ変更  
企画選曲委員会（5/12）は延期します。